

第15期 葛飾区社会教育委員の会議（第6回）会議録

● 開催日時 令和7年11月28日（金） 午後2時～4時

● 会場 ウィメンズパル 洋室D

● 出席者

社会教育委員（7人）

大島 英樹	歌川 光一	竹内 理恵	藤野 尚子
増田 龍二	加藤 藍	千葉 貴志	

事務局職員（3人）

生涯学習課学び支援係長	佐藤 吉裕
生涯学習課担当係長	柳澤 雅弘
生涯学習課学び支援係	矢作 孝寛

合計 10人

次第

議事

1 協議テーマについて

発表者 増田委員、加藤委員

発表内容 ア 活動していること

イ 生活の中のPTA

ウ PTAはこうあってほしいと願うこと

2 その他

【配付資料】

・増田委員 発表資料

—開会—

○事務局 ただいまから、第6回社会教育委員の会議を始めさせていただきます。本日の欠席者は伊藤委員、生涯学習課長、地域教育課の島村係長です。また、千葉委員から少し遅れるとの連絡がありました。

次に傍聴についてです。本日傍聴者はいらっしゃいません。

続いて会議録についてです。前回の会議録は区のホームページにて公開しております。

本日の資料について確認します。次第と増田委員の発表資料をお配りしております。

それでは、この後の進行につきましては大島議長にお願いいたします。よろしくお願いいたします。

○議長 皆さんこんにちは。本日は第6回ということで、さっそく始めていきたいと思えます。本日は増田委員と加藤委員からお話いただくこととなります。発表内容は、「活動していること」、「生活の中でのPTA」そして「PTAはこうあってほしいと願うこと」の3つです。早速ですが、増田委員からお話をお願いします。

○増田委員 資料を2つ用意しました。1つは読む用の資料で、もう1つは本田小学校の令和5年度のPTA総会の議案書の一部です。議案書は本田小学校でどのような活動をしているのかの参考として用意しました。活動していることは個人でやっていることと、PTA全体でやっていることが混ざっています。

個人の活動としては、まず本田小の父親ボランティアに9年間所属しました。その後、本田小のPTAの本部の委員、副会長になりました。その後、会長を去年と一昨年の2年間やりました。子どもが卒業したと同時に会長を辞めて、今は葛飾区の小学校PTA連合会（以下「小P連」という。）の担当のブロックがこちらに回ってきているので、手伝いということで役員として参加しています。

PTA会長のときには、東立石地区委員会に所属しておりました。そちらでは、地域の小学校2校と中学校1校のPTA会長と、それぞれのPTA役員が2名ずつ所属する決まり事でやっております。それと、本田小の学校評議員と学校開放利用者運営委員に自動的に所属するというようになっておりました。

PTAの主な活動内容として、年に一度の定期総会があります。こちらは事業案、前年度の事業報告、予算決算の報告をやっておりました。それから、夏休みのラジオ体操や、ブロック内バレーボール大会の開催、開校150周年の祝賀会の事務もしておりました。そのほか、PTAのイベントにも参加しておりました。PTAが学校に協力することとしては、入学式、卒業式、学芸会、運動会等のイベントの受け付けとパトロールをしておりました。

地域行事では、ロードレース大会の手伝い、スポーツフェスティバルへの子どもの引率、かつしか郷土かるた大会の予選の審判をやっておりました。

そのほか、三校連絡会というものがあり、本田小学校、渋江小学校、本田中学校の校長先生、PTA、7つくらいの町会の町会長、民生委員・児童委員が集まって情報交換するものを、1学期に1回ずつ各校持ち回りの会場で行っております。

通常の活動としてはこんな形でした。細かい内容は、定期総会議案書に、私が参加していたもの以外にもPTAの役員が参加したものや企画したものが書いてあります。東立石

の桜まつり、広報の活動、ベルマークの集計とかが載っています。改めて見ると、いろいろなことやっていて、すごい労力がかかっている組織だと思います。

会長をやっていたときに、労力がかかるので変えた活動として、従来やっていたイベントの形式を変えたというもの、PTAバレーボール大会の運営方法、あとは150周年の式典祝賀会の準備、この辺りは印象に残っていますので、細かくお話させていただきます。

まず、PTAのイベントを各学校で毎年これをやるみたいなのがあると思いますが、本田小学校は、従来そんなになかったのですが、140周年のときに、当時の会長が子どもたちに縁日みたいなものを味わってもらいたいという思いがあって、先生方にも参加していただき、校庭と体育館を使って、焼きそば、ハッシュドポテト、ドリンク、ヨーヨーなど、出店みたいなものをやるイベントを開きました。

後で出てきますが、PTA会長は地元で根差した方がなることが多くて、その方も本田小の卒業生で、幼少の頃から地域に住まわっていて、商店とかにいろいろなツテがあったので、ステージを作ってカラオケを開催するとか大きくやっていました。それは、子どもたちに喜んでもらうという目的と、開校140周年の式典にかかる費用を集めるという目的もあったと聞きました。

イベントはコロナに入ったところで一旦中止されて、イベントを行わなくなった期間が3年ほどありました。その後、徐々に活動は元に戻っていく中で、同じようなことをやるのは難しいとなりました。飲食物を出すのが難しかったり人脈も変わっていたりするので、体育館で子どもが遊べるブースをいくつも作って、そこを回ってスタンプを集めるイベントを作りました。

イベントを変えるに当たって、学校側と打ち合わせをした際に、学校側も校内で飲食等はしないでほしいという意向になっていました。PTA役員が収益を上げる目的で活動するのは気が乗らないといえますか、利益よりもお金を持たずに遊べるイベントにしたいという声もありましたので、そういったものに変更していきました。

変更したイベントについて、参加したお子さんとか保護者からは好評なイベントになりました。ただ、過去のイベントは学校を開放して地域の方も入れるものになっていたもので、そういったことを知っている方からは、寂しくなったとか食べ物がほしいといった意見をいただくこともありました。

皆さん仕事や家庭がある中で準備をしていきますが、軽作業ばかりではないので、一部の役員間の関係が悪化するといったこともありました。それと、2時間程度のイベントに多大な労力をかけることへの疑念は最初から言われていますが、関わった人は終わった後は楽しかったとみんな言いますが、今は大きいことをやろうと言いづらい雰囲気があると感じています。

全体の保護者にお手伝いの募集をかけていますが、それだけでは人が集まらなくて、細かに声をかけることで、ある程度の人を集めることができました。2年間このイベントをやりましたが、今年は別のイベントを行うと聞いております。イベントは保護者負担等を考えながら、その時々当事者たちで変わっていくのかなと思っております。

次はPTAバレーボール大会についてです。今はやっていませんが、以前は葛飾区で公式戦をやっていました。葛飾区の8ブロックで予選を行い、勝ったところは本選に出場し

て優勝校を決める形で、小P連からも補助を出していました。やっている方の熱量がすごく、やっていない方との考え方の違いが難しい問題でした。

その後のバレーボールをどうするかについては、各ブロックで判断するとの通達が来ていたので、私の所属する第2ブロックは、ブロック内の交流を図るために、ブロック内の大会はやるという話になっていました。ただ、その大会を開催するのは、ブロック内4校の各校が幹事になって持ち回りで主催と準備をして、当日の司会進行をしていくという決まりでやっておりました。

ただ、コロナ明けから、PTA役員の負担軽減を考えながらやっていく中で、PTA役員の負担軽減に加えて、バレー部の存在意義の話も出ました。本田小の部活動はバレー部しかないので、バレー部だけ予算が付いているのはなぜか、特別扱いし過ぎではないかという意見が多く出ました。本田小が幹事校だったので主導して、公式戦もなくなったので、今後はバレー部が主体となって交流戦をやってくれませんかという流れに話を持っていくようアンケートを取るとか、そういった提案をしておりました。

その話し合いがなかなか難しく、バレー部は学校代表で出ているのに、なぜ主催までしないといけないのかという考えの方もいます。上の方ほどそういう考え方が強くて、バレー部はOBやOGとの繋がりや地域の方との関わりが非常に強くて、周りを巻き込んで今までどおりPTAが主催して、バレー部は1プレーヤーとして参加したいとの主張がありました。協議を進めて最終的には、バレー部が主催でPTA役員も協力するという形になりました。ただ、それで完成ではないので、年によってまだ練りながらやっていますが、多少は役員の負担が減っていると思います。

学校によってバレー部の位置付けと関係性が全然違って、バレー部の発言力がものすごく強くて、PTAの本部役員がバレー部の下にいるようなところもあったり、フラットなところもあったり、単独の学校だけで判断するのは難しい案件でしたが、こういう問題も潜在的に持っているという事例でした。バレー部に入ると、PTA役員をやったのと同じカウントになる学校もあります。

○加藤委員 柴原小もそういうのを取り入れました。こちらのブロックは野球とバレーと卓球ですが、部員が集まらないので部に入ればPTA役員としてカウントすると昨年度からなりました。

○増田委員 私が会長のおきに開校150周年を迎えておまして、式典は学校が主催で、祝賀会はPTAの主催という形を取ることでしたので、共同の実行委員会を作って開催準備をしました。子どもたちに寄贈品と記念品ということで、テントを寄贈して、記念品として、本田かるたを子どもたちに配りました。かるたは本田小学校と立石をモチーフにしたもので、読み札と絵を書いてもらい、印刷業者に依頼して作成しました。

お金が結構かかることを知らなくて、やっていくうちに分かりました。航空写真やクリアファイルをよく配っていると思いますが、あれはPTAが負担して、補助額、記念誌も区から補助が出るようなのですが、上限が決まっていて、それを超える分はPTAで負担してくださいということで、なかなか難しい問題だというのがあります。学校や生徒規模とか、10年ぐらいかけて周年記念費を確保していきますが、確保できなかった場合は、記念品が小さくなるかということもあり得るのかなと思いました。

前回、予算を集めるためにイベントを行っていたというのも、この辺で理解ができた部分ではあります。他校の周年行事を見聞きしている範囲では、本当に小規模でやったとか、祝賀会はやらなかったとか、そういうのはありました。やらない決断に持っていくのは、地域性もあり結構難しいと思いました。そんな形の活動をしておりました。

生活の中のPTAということで、私の中でPTAをどう捉えているか、どういうふうに参加しているかということですが、PTAに関わるきっかけは、長女が小学校入学したときに、何の気なしに父親ボランティアというものに参加したことです。歴代の男性PTAの役員が、父親ボランティアから探し出されるという流れがあったので、そのまま勧誘されるがまま、PTA本部会長という流れでやっております。特に大きな志があつてなつたわけではないです。

仕事についてですが、現場監督の仕事をしていまして、何とか自分でスケジュール調整ができるので、時間を作ってPTA行事に参加していました。歴代の会長は地元出身の経営者の方が多くて、時間の融通が利く方が多かったです。ただ近年は、行事への強制参加に対する考え方が変わっていて、出られるものは出るけど、出られないものは会長でも出ないといった考え方も浸透してきているので、会社員の会長も少しずつ増えてきている印象があります。

私の中の考え方の変化としては、当初PTA活動は、恐らく今多くの保護者が思っているのと同じように、関わりたくないという印象を持っておりました。PTA活動は、行事、企画、運営する団体程度の認識でした。休みが減るとかそんな感じの認識でした。ただPTA本部に入会して、PTA活動、行事運営、学校サポート、地域活動の参加など、多岐にわたっていることが分かりまして、PTAの必要性を実感しました。

特に、地域が子どものために活動しているということが、よく見えるようになりました。また、運動会や学芸会といった、広く公開されている学校行事を当然のように保護者として見ていました。なぜPTAが受付や準備をしないといけないのかと思っていたのですが、学校側に公開する義務はなくて、見させてもらっているということです。見させてもらうのに、学校側に警備や受付をやっている余裕もないし、そういったところ分かるようになったので、学校との相互関係というのも大切だと実感するようになりました。

一方で、その状況を他の保護者全体に浸透させることは難しいと感じています。現状を浸透させることが難しいというのが、PTA活動参加者が増えない理由ではないかと感じています。実際にPTAという組織や地域との繋がりがなくなっても、勉学や生活をしていくことは可能だと思います。ただ、PTA行事、地域参加は、子どもたちの情操教育的な面や専門的なところは分からないですが、地域ぐるみの防犯性とかそういったところも、一見すると分からない部分の効果は発揮していると思いますので、そういった見えない部分の繋がりや効果を、多くの保護者がイメージできるように伝えていくことが課題だと感じております。

PTAにこうあってほしいと願うことについては、基本的に子どもたちの様々な環境を改善するために作られた組織がPTAだと思っておりますので、実際に負担が多いだけで実りの少ない仕事は減らしながら、PTAという組織自体はなくさずに維持して欲しいと思っています。学校・地域とお互いに無理なく連携していける関係性を作ってほしいと思っております。ざっと言いましたが、一応私の発表はこんな形でございます。

○議長 どうもありがとうございました。非常に具体的に何をしているかということをお教えいただきまして、材料がすごく出てきているというふうに思いますので、委員の皆様からご質問をいただきたいと思います。

○加藤委員 増田委員は今年度小P連に入られていますか、今小学生のお子さんはいらっしゃいますか。

○増田委員 今はいないです。中学生と高校生です。

○加藤委員 それでも小P連の活動をされているのですか。

○増田委員 今の会長が本部役員とかをやってきた方ではないので、周りの現役のPTAの状況を考えると、こっちまで手を出すと大変だろうから手伝いましょうと、本部を引退する方から持ちかけられてやっています。

○事務局 三校連絡会のお話ですが、近隣の3校といったときに、本田小、本田中、渋江小ですか。川端小ではないですか。

○増田委員 間違えました川端小でした。

○加藤委員 三校連絡会というのは中学校も含めて、PTAの会長が集まるのですか。

○増田委員 メンバーは、PTA会長、PTA校外担当、校長、副校長、町会長、民生委員・児童委員、青少年委員、地区委員長、地域コーディネーターです。

○事務局 どのようなことを話し合うのですか。

○増田委員 主に生徒の安全面に関することを話し合います。それと校長先生から最近の学校の近況や、町会長からは最近の動きやイベントについて話があります。

○事務局 青少年育成地区委員会の構成メンバーと大きく変わらないですね。ということは、話し合われている内容が違う。青少年育成地区委員会は、地区委員会としていろいろとやることになって、それをやるために所属しているいろいろな方々に協力をお願いすることが多くなっていますが、三校連絡会はこちらかということ、子どもたちに関わることを話し合うということですね。

○増田委員 そうですね。

○事務局 他の地域でもやっていますか。

○加藤委員 私の地域では、ここまでいろいろな方を集めたものはないと思います。

○竹内委員 青戸でやっているといます。青戸小、青戸中、中青戸小の三校で。

○事務局 地域によって三校連絡会をやっているという話は時々聞きます。

○増田委員 地区委員会と構成メンバーが重なっていますが、地区委員会の集まりはイベント事だったりするので、校長先生は集まりに出ないです。初回の総会には出ますが。そういったところの情報交換は、一斉に集まることはないです。

○事務局 地区委員会はイベントを抱え過ぎているので、それを回すのにどのような協力体制を作るかがメインになってしまう。

○藤野委員 各団体からの報告はしてもらっていますが、それと行事で目一杯です。

○加藤委員 本田小学校でも会長が決まらないという悩みはありますか。父親ボランティアがあるので、自然とその中で次の候補が見つかるイメージを持ちました。

○増田委員 苦労したときもありました。コロナの間に父親ボランティアがいなくなりました。3年ぐらいいなくなって、その後下の人が入ってきて、たまたま声をかけた人がや

ってくれました。結構苦勞して次の次までは決まっています。次の次まで決めたから、次はお願い致しますと言いました。

○事務局 後任はいるから安心してということですね。

○増田委員 なかなか見つからなくて、いいよと言ってくれる方も子どもが小さいから妻から待ってと言われて、旦那はいいけど妻が駄目のパターンもあるので難しいです。

○加藤委員 父親ボランティアは何人ぐらいいるのですか。

○増田委員 実質活動している人は6人ぐらいです。

○竹内委員 父親ボランティアは卒業しても継続はできるのですか。

○増田委員 卒業すると別のグループLINEに入りますが、あまり声は掛からないです。困ったらいつでも連絡くださいという体制にはなっていますが、現役で賄われているのが現状です。

○竹内委員 父親ボランティアというと、ソフトボールのお父さんたちみたいなイメージがあります。

○増田委員 本田中学校のおやじの会は、卒業していても皆で集まって活動しています。本田小学校の父親ボランティアは、地域コーディネーターに管理された組織になっています。なので、活動としてはおとなしいです。

○事務局 おやじの会の立ち位置は学校によって違って、本部とくっついているところもあるし、別行動しているところもあって不思議な組織です。

○議長 お話を聞けば聞くほど、前も言ったように周りから見たら構造的なものがほぼ見えない。共有できるように、図でも絵でも一度できたらと思います。

○竹内委員 学校ごとに違う。

○議長 そうですね。だからその話も重なってくるし、それが見えてくると何かその先に、まず現状お互いの形が見えるだけでも違ってくると思います。今日お休みの島村係長のところでは見えていますか。

○事務局 見えてないと思います。おやじの会は、父親の会や学校ボランティアという名前のところもあり、いろいろな形態がありますが、行政が支援する仕組みはないです。PTAは任意団体ですが、PTA支援は行政の役割なので、地域教育課はPTA連合会には支援しますが、各学校のPTAには個別の支援はしていません。各学校のPTAからの相談は受けますが、具体的に金銭の補助はしていません。

○竹内委員 葛飾区おやじの会というのはどのような団体ですか。

○事務局 葛飾区おやじの会という集まりはありますが、定期的に何かをやっているわけではなく、不定期に情報交換をやっている任意の団体です。私もおやじの会に関わっていた時期はありますが、何かイベントをやるとか、具体的なミッションはあまりないですが、進路フェアの手伝いは1つのミッションとしてあるかもしれません。

○竹内委員 そば打ちを学校に行って教えたりしていましたよね。

○事務局 個別にやっていた時期はあります。

○竹内委員 長野に畑を借りて、そばを作って。

○事務局 生涯学習課で子ども食育クッキングという事業があって、子どもたちに料理の楽しさや食の楽しさを味わってもらうための事業で、その中のそば打ち体験を、おやじの会の人たちにやってもらっています。いろいろな活動はしていますが、年間スケジュール

を作ったの活動はあまりやっていなくて、所属している人の中で得意分野がそれぞれあって、それを生かして個人として参加するのではなくて、おやじの会という名称で参加をしている感じなので、実態としてあるかというとは実はあんまりないということです。

葛飾区おやじの会は、各学校のおやじの会の人たちで構成されていますが、全員所属しているわけではないです。

○事務局 あとはPTAの他に、PTAのOBの組織を持っているところもあって、OBPTA連合会（OP連）があります。そこも任意の団体なので、行政は小中のPTA連合会は支援していますが、OP連の支援はしていません。

○竹内委員 進路フェアとかの手伝いをしているのはOP連ですよ。

○事務局 そうです。そこは協力をしています。現役のPTAの方々には、実態があまり見えないかもしれません。

○加藤委員 そうですね。

○竹内委員 現役のPTA方は、OP連から声がかかったりしないのですか。

○加藤委員 ないですね。つながりがある方に声がかかるのではないですか。例えば青少年育成地区委員会の中とか。

○竹内委員 あの人いいから誘おうとか。

○事務局 OBになったからあなたはここに加入しますといったことは多分なくて、一本釣りをしているのだと思います。

○千葉委員 中学校PTA連合会（以下「中P連」という。）の総会で引き継ぎのときに、OP連の会長がいらして入会の声掛けをしているのは何度も聞きました。会長をやられた方は勧誘されるかだと思います。以前の中P連では歓送迎もあったので、そこでも勧誘ができましたが、コロナの影響で歓送迎会はなくなりました。

○事務局 言われてみると第1回の小P連と中P連の理事会で、その時にOP連の方が来て話があったり、進路フェアの時期と重なるので、進路フェアのお知らせをしたりというのがあります。

○議長 いろいろな名前を持った人たちが、網目のようになって地域ができているのは、内側の人からは少しずつ自分の窓から見られる。でも、そこに関わらないとその網目からもこぼれてしまうという、それをいろいろなことをやっているということ、まずは知ってもらうことが第一だと思います。

○竹内委員 子ども会とかも登場人物として出てきますね。

○議長 PTAというお題をいただきましたが、1人で語れることではなく、こんなに関係者がいるということは、見てもらうことが大事な気がします。こんなに人の繋がりがあるとことを知ってもらえれば、どこかを入口にして、結果的にはPTAと繋がるのかなと思います。今は実態をたくさん教えていただくことで、皆さんお頭の中にいろいろ浮かんでくることを増やすことができたと思います。

続いて加藤委員からお話をいただきたいと思います。

○加藤委員 よろしくお願ひします。自分は中学校の代表としてここに来ております。簡単に自己紹介をしますと、柴原小で1年副会長をやったあと、4年会長をやりました。子どもたちが卒業して常盤中に入り、会長として2年目です。自分が柴原小で会長になったときは、コロナ真っ只中のときで行事とかほとんどなくて、会長というポジションにいま

したが、大きなやることはあまりなかったです。卒業式や入学式も大分簡略化されて、祝辞もありませんでした。会長4年目のときに、イベントや行事が元に戻り始めて、会長らしい業務をするようになりました。

その中で活動してきているということで、自分は会長という立場ですが、行事やいろいろな雑務を回しているのは、副会長のお母さんたちがメインになっています。副会長の中でもリーダー的な方がいまして、1年間の全体の流れを把握していたり、各行事のお作法とか回し方を分かっていたりする方が1人いて、その方がいると会長は安心して全部お任せして、行事が回っていくというイメージです。多分どこの学校でもそうなのかなと思います。会長は対外的な小P連や中P連での活動であったり、お子さんとの話であったり地域の方とかもちろん行政の方とか、こういったところが会長の仕事になっていくと思います。

副会長のリーダー的な方がいると安心はできますが、どこかのタイミングでそういう方が出ないときがあると、活動がとても大変になります。会長は学校の行事のこととか、あまり深くまで理解していないので、リーダー的な方がいないと行事が回らなくなるのかなと思います。中学校は近隣の複数の小学校から上がってくるので、大体中学校でPTA活動をする人は、小学校で経験された方たちなので、その中でリーダー的な方が入ってきます。

会長は他校の方や地域の方とのコミュニケーションの機会が多いので、青少年地区委員や青少年委員が何をしているか見えますが、副会長は意外と対外的な繋がりが薄くて、地域活動の理解も同じように薄くなっていく傾向があると思っています。

例えば、先ほど子ども会の話が出ましたが、地元で生まれ育って自治会の手伝いとか、子ども会に元々入っていたお母さんとか、地域と繋がりのある方は、地域活動についての理解もありますが、そういう活動をしてこなかったお母さんは、PTAの活動の中でも学校行事に対してはすごくお手伝いをしてくれますが、青少年育成地区委員からお願いされる地域のお手伝いや、自治会からお願いされるお手伝いは、面倒くさがるというか、もうやらなくてもいいよねといった声を聞いたりします。自分の子どもが登場しない活動に対しては、後ろ向きの姿勢があるのかなと思います。外から引っ越してくる方も多くなっているので、地元密着していた方の関与がPTAの中でも薄くなってきていることも感じています。

次に生活の中のPTAということですが、自分はPTAの行事や会議があるときは、もちろん仕事を調整して参加するようにしています。IT系の仕事をしてはいますが、時間の調整がしやすいので、何とか立ち回りができています。ただ、会議や行事が数多く入ってくると調整できないので、参加できないということもありますが、幸か不幸か仕事の調整はしやすいので参加できています。あとはPTAの会長は組織の長になるので、いろいろと勉強させてもらうことがいっぱいありました。PTAの会長になることによって、人間的にも成長できたという思いはすごくあり、やってよかったと思っています。

あとPTAの活動に、今まで仕事の中で学んできたものを当てはめるとうまくいかないかと思っていて、杓子定規に仕事と同じようにやろうとするとうまく回りませんでした。自分と副会長のお母さん同士のコミュニケーションというのがありますが、お母さんたちの阿吽の呼吸があって、認識合わせをしていなくてもお互いに分かり合っていて、落としど

ころにうまく着地するということがあって、お母さんたちは言わなくても分かるという部分があって、ここは感動しました。

最後にPTAにこうあってほしいと願うことと、それ以外のこともあります。先ほど増田委員から出てきましたが、無駄をなくしてPTAの負担を減らしていこうとする動きがありますが、この考え方は諸刃の剣だと思っていて、活動を縮小することでPTAの負担が減っている自覚はありますが、PTAの存在自体が薄くなってしまっていると思っています。今まで1人1役とか、常置委員会の校外や学年学級とかをなくしていく学校があって、なくなることによって保護者がPTA活動に関わる機会が減ってしまい、PTAは何をやっているのか見えないとか、PTAの存在が薄くなってしまおうということがあるのかなと思います。それによって、やはりPTAに協力しようとか、本部に入る方たちも減ってしまったと思います。

無駄をなくしてPTAの負担を減らす方向性はいいと思いますが、それだけだとPTAの存在自体が小さく薄くなってしまおうので、やはりいろいろとPTAの存在感をアピールすることはしていけないといけないと思います。PTAの存在自体がどちらかといえば、受け身な存在だと思っていて、学校の行事があれば手伝うし、地域の行事があればもちろん手伝いますという感じなので、もっとPTAの存在をアピールしていくような、能動的な活動を今後してかないといけないと思います。受動的になっていることで、先ほど言った悪いイメージがついてしまうと、それがそのままになってしまいますし、もっとアピールできればPTA自体がもっと明るく見えるのかなと思っています。

あとは学校によってかなり温度差があると感じています。例えば会長の交友関係とか、副会長もコネクションがあり、いろいろな方を知っているというところは、結構大きいと思っています。先ほど増田委員からもありましたが、今まで地元の力が強い方がPTA会長になったりすると手伝う人も多くなりますし、自治会の方達の顔も広いと活動しやすいといったことがあるのですが、私も葛飾区で生まれ育った人間ですが、なかなかそういう繋がりを持っていないかたりしますし、こういうところも結構あって、その時々によって温度感も変わってくると思います。今は地元の方が会長になるケースはそんなに多くないのかなと思います。どちらかというところ、声をかけられてやっている方が多い気がします。

あと本来子どもについて悩んで行きたいのですが、恐らく運営関係で悩むことがほとんどになってしまっていて、ここはPTAとしてもあまり良くないと思いますので、人が足りない、行事を手伝う人がいないとか、マイナスなイメージについて悩むことがほとんどなので、できれば子どもたちについて悩んでいきたいと思っています。

PTAという名前の組織が、保護者や学校、地域の繋がりとの壁になってしまっているのであれば、形を変えていくことも1つ案なのかなとは思っています。やはり、PTAという名前が出てしまうとちょっと引いてしまう保護者がいることも聞いていますし、それで学校の手伝いから距離ができてしまうのであれば、その名前ではなくてもいいのかなと思ったりします。私からの話は以上となります。

○議長 ありがとうございます。皆様からご質問やご感想をお願いします。

○増田委員 副会長のお母さんがメインというのは、本当にそうです。他の学校の会長も、何でも知っているお母さんがいて、その人に任せれば回る感じになっているそうです。私のところも何人かいましたがすごく有能な方で、特に地元のそういう方がいて、各

町会の方と子どものときから知り合いといったことがありました。そういう方がいると、非常にやりやすい年になります。

○加藤委員 会長がいなくてもその方がいれば回るので、そういう方がPTA本部にいてくれることが大事です。

○竹内委員 私の時代はそういう方を筆頭さんと言っていました。

○藤野委員 筆頭さんをやっていました。女性が多いので女性を取りまとめる。取りまとめがないと意外とまとまらない。

○加藤委員 PTA本部の役割の中には嫌な役割もあって、そういうことはこちらからは言いづらいので、筆頭さんに代わりに言ってもらいます。

○藤野委員 嫌われ役を買ってでます。

○加藤委員 いろいろやってくれて、ものすごい時間を使ってくれるので、そういった面でもありがたいし、嫌われ役な面もできて、そういう人がいないと回らないです。

○事務局 何となくあの方かなと想像できます。いろいろなことに目配せができて、発言力が強い、そういう方っていらっしやいます。

○藤野委員 会長は当日来たら仕切ってもらって、筆頭はそれまで仕切るのが仕事です。

○加藤委員 常置委員会や1人1役がなくなると、そういう方たちが埋もれてしまいます。本来、常置委員会を1年の初めの保護者会で決めますが、学年学級や校外とかやってくれませんかと言っても手を挙げる人がいないので、ものすごく嫌な空気が流れます。誰もやってくれないのであみだくじで決めるといった流れがあって、みんなやりたくないし、早く帰りたいし、早く誰か手を挙げてといった雰囲気の中で決めていきます。

そういったものはなくしていこうとしますが、そういったものがあると、中には率先して手を挙げてくれる人がいれば、活動に理解があることが分かるので本部にも声をかけやすいですし、筆頭さんのような方を見つけやすくなるので、PTAも成り立っていきませんが、そういう機会がどんどんなくなってきてしまうので、PTA活動に理解のある人も埋もれてしまい、見えにくくなってしまうというのはあると思います。

○藤野委員 筆頭さんは、地区委員会とかにはPTA会長や副会長が来ることが多いので、能力もやる気もある方が埋もれていってしまう。地区委員会とかに本当は入ってほしいというのはあります。そこをどうやって拾っていくかが私たちの中での課題です。

○加藤委員 PTAの中で、地区委員会の活動をなるべく抑えていきたいという声があります。そこはやはり、地域の活動とかの理解が薄くなってしまっているのが原因かなと思います。地区委員会の行事とかも手伝いは楽しいですし、終わった後は良かったとなりますが。

○藤野委員 コロナで1回止まっているので、なくてもいいような行事になっています。去年なかったのに今年やるのかといった雰囲気が残っています。私たちもどうにかしていかないといけないと思っています。私もPTA会長に話を持って行きますが、PTAがないところは本当に困っていて、校長先生に直接言いに行くしかありません。PTAがしっかりしていないと、私たちもどこを突破口にすればいいのか分からない。

○竹内委員 地区委員会の年齢層は、60代、70代が主で、PTAから入ってくれるお父さんお母さんがすごく少ないです。

○藤野委員 PTAの方に何とか残ってもらいたい。

○竹内委員 最後に入ったのは5年目のあの人となるぐらい新しい人が入ってくれないので、お手伝いとかそういうときには、PTAのお父さん、お母さんも言えば来てくれますが、なかなかそれが地区委員会に残らない。

○藤野委員 学校のカラーもあります。代々残ってくれるところもあれば、会長が終わればスパッと切ってしまうところもあります。

○事務局 PTAと青少年育成地区委員会の関係性は、地区ごとに違っていて、かると子どもを犯罪から守るまちづくり活動はPTAでやっているの、両方の組織を見ていると、PTAと地区委員会の距離が近くて、PTA活動が終わると地区委員会に入る地区と、そこが切れている地区があつて、構成メンバーを見ると分かります。

どちらがいいとか、繋がるのがどうなのかという議論はあるのかもしれませんが、少なくとも、それぞれ地域のためとか、子どものためにと活動している中身があるので、目指すところはあまり変わらないはずなのに、お互いに協力する関係性が微妙にずれてきている気がします。コロナが本当に大きかったと思います。

○藤野委員 コロナ前だとこういう行事をやるからとPTAに依頼すると、大体人が集まってきましたが、コロナの後は、それは何ですかとなってしまって、説明をしないといけなくなっています。

○竹内委員 どうやって人を集めるのか地区委員会に聞いてくることができました。

○藤野委員 前の人に聞いても分からない状況になっていて、スポーツフェスティバルとは何ですかと聞いてくることもありましたが、ただ、地区委員会でもいざやろうと思ったら、半分ぐらい分からないメンバーで向こうにも申し訳ない感じです。

○増田委員 ボランティアというところが一番難しい。

○藤野委員 そうです。強制はできないので。

○増田委員 PTA本部だからあなた行ってくださいというのも難しい。

○藤野委員 昔はそれが当たり前だったので、PTA本部だから子どもを連れて行くのが当たり前で、今は嫌々子どもを連れて行く感じではなくなっているので、なかなか人数を集めるのが大変です。今年もスポーツフェスティバルの人数を集めるのに、毎日校長先生に電話しています。

○増田委員 小学校の先生の研究発表なんかも、いろいろな学校の先生が見に来るようなことがあると、案内とか受付の手伝いが必要なきがありますが、昔だったら本部役員は有無を言わずだったらしいのですが、私のときは何人か集めてという感じでした。なんで我々がやるのかと、そういう考えの方が今は多いです。

○加藤委員 地域行事とか自治会の行事もそうで、参加するお子さんもだいぶ少なくなっていると思います。子どもが参加すれば保護者も出てくるし、その中で手伝ってくれますが。PTAだけで子どもを集めるのは難しいので、学校からプッシュがあるとまた違うと思います。ただ、学校が子どもを集めると、先生がついていけないといけなとか、働き方改革などもあるので、学校としても動きにくいのかなと思います。

○増田委員 町会長が今の子は忙しいと言っていました。習い事とかがあるから、イベントをやっても来る暇がないと。

○藤野委員 スポーツの日にスポーツフェスティバルをやっても、その日はスポーツの大会が多いから、スポーツをやっている人は来ませんと言われてしまいます。

○千葉委員 中学校ではスポーツフェスティバルにおいて八の字飛びに参加する学校も多くありますが、フリーに募集しても人数がなかなか集まらないです。そのため部活単位での参加をお願いすることが多く、部活の大会日程を見て声をかけます。ロードレース大会も、例えば1つの地区委員会で中学校が3つぐらいあると、各中学校が選手を出場させるため全生徒に募集した場合、走るのが好きな子も数名いますが、あとはもう部単位で出てもらいます。

最近では11月の中旬ぐらいに期末テストがあるので、11月の中旬によくロードレースがありますが、テスト前の場合は参加できないこともあります。試験前なので、保護者からも1週間前から活動停止ではないのですかといったご意見があります。試験や行事との部分では、難しい場合も思います。

いろいろな事を実施するシーズンがずれてきたことも影響があると思います。各地域行事は毎回同じシーズンにやっていますが、学校の行事や進路に対するスケジュールがずれていて、部活動の大会もコロナの後には実施時期が柔軟になりました。昔は、新人戦は秋にしかやりませんでした。今は遅い競技だと1月にやる競技もあります。時期がいろいろ分散して実施するようになっており、いろいろな部分がコロナや気候変動で変わってきました。

○竹内委員 夏は暑いからずらすのもそうですよね。

○藤野委員 全部ずれてきて運動会が10月にあつたりして、日程が重なってしまう。

○事務局 そうすると、今まで重ならないようにやってきたつもりが、行事がずれてきているので重なってしまう。

○藤野委員 中学のグラウンドを借りてロードレースをするので、学校の行事が優先になるので、日程はここしかないのをお願いしますと頼むしかなくなった。

○千葉委員 小学校では11月に運動会を実施する学校もあります。

○事務局 そう考えると、子どもたちが出る行事は、地域の行事も含めてたくさんあるのですね。

○議長 それに加えて、個人として塾や趣味の習い事を重ねたらきりがなくて、子どもが少ない状態で大人がみんな頼りにしてしまうと、それは大変だと思います。登場人物がこれだけいるといったことが整理されていない。誰も怠けるつもりはなくて、ぜひという気持ちがあると、余計に子どもたちに集中してしまうのではないですかね。

○事務局 逆の面で見ると、そういうイベントを作っている地域の団体の人たちは、子どもを集めるためのいろいろな話し合いをしたり、いろいろな組織と絡んだりすることで、人間関係が培われて、そこが地域を支える大人の集団になってきたという事実はあると思います。それは地区委員会や子ども会もそうだけど、子どもの数も減って子どものやることが増えて、子どもたちの奪い合いになって、なかなか子どもたちが来ないとなると、このイベントはやめようという話になり、大人は大人で忙しくなって、そういう会合を持てなくなり、人間関係がつかれないということになると、そういうことが消えていくし、人間関係が希薄になるのが今の状況です。

○竹内委員 地域でイベントをやって、子どもを集めるというのは日本だけでしょうか。

○事務局 海外はどうなのでしょう、地域イベントをつくる大人の集団というのは。

○副議長 例えばドイツだと、そもそも部活動は地域でやるもので、学校でやるものではないです。そういう場所では地域の活動も盛んだと思います。

○竹内委員 地域の大人がボランティアで出て、何かイベントとかはあるのでしょうか。

○副議長 私もあまり聞いたことはないです。日本でこれが成り立っているのは学区があって、学区があるから大人も学区でまとまって、そこで何かしてあげようとなる場所があるので、社会教育としては日本独特なところだと思います。

○議長 葛飾区の学校選択はどうなっていますか。

○事務局 基本的に学区域は維持していますが、学区域を飛び越えて選択することもできるようにはなっています。ちょうど今の時期、新1年生の抽選がありました。校舎が新しくなったところは、すごい倍率になっているようです。

○議長 品川区は率先して学校選択を入れましたが、始まった頃は人気のある学校に偏ってしまうこともありました。そうすると、学区に住んで地元で根差して頑張る人と、それを消費者的に、あの学校がいいから遠くから通ってきて、受益はするけど家は学区外となってしまうと、担う人と味わうだけの人に分かれてしまう。

○事務局 地域というか、住民が分断されるわけですね。

○竹内委員 葛飾区も1回やりましたよね。

○千葉委員 学区制に戻りました。

○竹内委員 東日本大震災の後に、バスとかで来ている子をそこまで連れて行くのも大変だという話があって、学区制に戻したのですよね。

○藤野委員 ロードレースは地域が決まっていて、地域外の子は原則順位がつかない。

○事務局 地域対抗意識というのが日本独特のものなのですかね。

○副議長 日本は学区の問題とお寺とか神社の問題もあります。そのコミュニティも絡んでいて、独特のコミュニティ観を持っている。それが自分の自由な生活と合っているかどうかの齟齬も最近出ているのかもしれないです。そもそも、そんなことを考えてここに住んでいるわけではないという意識もあったりして。

○議長 氏子の方は自動的に向こうから位置付けられます。葛飾区ではあまり感じませんでしたが、墨田区に住んでいるときに、牛嶋神社の氏子と言われました。きっちり線引きがあって、ここから向こうは香取神社ですということがありました。

○竹内委員 それは誰に言われるのですか。

○議長 神社からチラシをもらって、ぜひここへ、いろいろなことをやってくださいと書いてありました。あそこはぎりぎり昔の江戸の市中に入っているところと、入っていないところがあって、そういうまちづくりのプライドみたいなものがあつたのかなと。江戸の朱引きという市中の線引きのところの内側になる。門松立ての穴が家の玄関にあって、そこに門松を立てている家がありました。

○藤野委員 私の住んでいるところでは、香取神社のお祭りの線引きはあります。

○事務局 それが生活にうまく密着しているかどうかは、また別の話だと思います。

○千葉委員 小学生までは子ども会などもあるので、地域を基盤とした活動がありますが、中学生は子ども会を卒業してしまいます。そういう面では各学校は何地区委員会と決まっているので、小学校のときは町会や子ども会に加えて学校単位での地域のつながりがあります。学校を拠点として地域で集まったり、地区委員会からの支援があつたりといっ

た線引きの中で運営されているのが通例だと思います。町会や子ども会、地区委員会は学校と地域を結びつけるは大きな位置付けだと思います。地域とのつながりはやはり学校にはとても必要だと思います。

○事務局 学校がそこにあることで学区域が示されて、その学区域をもとに特に小学生はそこで生活をして、学校に行っている間は学校ですが、学校にいないときはその地域で遊んだり、生活したりしているわけで、そこを見守っているのは地域の大人たちということです。

○竹内委員 一番小さなコミュニティが学区域。

○議長 昔のことを思い出すと、隣の小学校の学区に近づくと、どこから来たと言われることがあった。

○事務局 中学になると顕著ですよ。

○議長 小さい頃のそういうのが染みているのですよね。

○千葉委員 そういう意味では、学校がそこで1つの区分けをする中で、大きい存在であると思いますが、子どもたちも他の学校に友達がいても、同じ学校の友達のほうが繋がりは強くなっていくと思います。そうしたときに、保護者同士の連携が必要になってきます。もちろん、生徒と保護者と担任の三者で教育の充実を図っていくことが求められますが、やはり保護者が母体となる団体がないと困ることもあると思います。そこが加入率の低いPTAと中学校が連携して協議や改善していくことが、果たして本当に改善へと進むのかということなのです。

例えば5割の方しか加入していなく、そこで話し合ったことがある意味では保護者の方の総意のような形のとらえ方をして有効であるのか問われることがあるかもしれません。学校を運営していくうえでPTAからの意見を参考にすることはこれまでも行われてきました。例えば、制服やバッグを変えるときとか、コロナのときには登校の時間を変えるときとか、大きな変更を検討する場合は学校のトップダウンではなくて、PTAの方にも相談して、学校側も工夫したと思います。

内容によっては学校としても保護者の方に相談したいし、意見も聞きたいとなったときに、例えば保護者全員にアンケートをとっても、多様な意見や相反する意見をいただく場合もあるはずです。やはり、学校からPTAにある程度の落としどころを見つけて相談していかないと、学校も先に進めない部分があると思います。

○事務局 それは自治町会にとっても同じことで、自治町会の加入率5割ぐらいだから、地域住民の総意といっても半数の方は入っていないのが現実なので、だからいらぬかというところではなくて、やはりそれは1つの頼るところというか、それは行政もそうだし学校もそうだと思いますが、そう考えると自治町会の存在は大きいと思います。だから、PTAもなくなったら大変なことになるという感じもします。

○千葉委員 学校として保護者の方とどうキャッチボールをするか、例えば、アンケートで73%の方が賛成していただいたといったやり方はあると思いますが、当然そうではない相反する意見の方にも丁寧に説明する必要が生じる場合があります。多様な意見をいただいたときに、どこまでそこに答えられるかという難しい部分があります。やはり、保護者全体として包括的に子どもたちのことを考えていただける団体、動いていただける団体として、PTAは学校としては大きい存在だと思います。

○加藤委員 ありがとうございます。

○副議長 増田委員の資料を見ていて思ったのですが、150周年記念のところで記念誌代の話がありましたが、同窓会がお金を集めて記念誌を作るのではなく、PTAが補うのが公立小中独特の難しさだと思いました。要するに、母校のために集めたお金ではなくて、その時の現役のPTAの人のお金によって、何周年の物が賄われるというところが、本当は150周年なので、そのときの保護者が払うってところが、PTA独特の位置付けの難しさでもあるという気がしました。

先ほどの筆頭さんの話もそうですが、今子どもが学校に通っていなくても、その地域にずっと住んでいて、よく物事を知っていて、その学校のことが好きな人が実は入りづらくなっているところと、その辺のタイムラグみたいなものがあると思います。たまたま自分の子どもが通っているから何かしないといけないと、プレッシャーに感じている人もいれば、この地域も学校も好きだからやりたいという、長年のすごい蓄積を持っている方がいると思いますが、その辺のタイムラグみたいなものをすごく感じました。そこがうまく結びつけばいいと思います。

バレーボールの問題とかもこの学校はとにかくバレーボールが好きなので、それがこの学校の特徴だと保っていきたいのであれば、それを特徴とする学校ということでもいいと思います。そこにたまたま我が子が通っているから入った保護者が、それに巻き込まれたと思うかは微妙なところだと思います。

○事務局 PTAは全部蓄積しているようでしていない、その場その場で判断しないとけないことがあって、先ほどの松田委員のたまたま150周年に当たってというのが、まさに表しているというか、当たったら大変みたいな。蓄積があるはずなのに、そこの当事者に課せられる課題というか、そういうことであるってことですよね。

○増田委員 地域によって差があると思います。特に本田小の周りは古くからいる方、OBの方もすぐ近くにいますし、先ほどのバレーボールも隣の隣の小学校のOBの会長がトラブルを知っていると、それぐらいコミュニティが近くて、義務感みたいなものが生まれます。一方で、外から来た方がたくさんいる学校は、入れ替わりの多い地域の小学校とかだとOBとの関係性があまりないから、そういうプレッシャーがないというのは聞いたことがあります。本当にそれに翻弄されるPTAは多いのではないかと感じました。

○議長 1回ごとに結論を出すとかいう話ではなくて、お話を伺うのを重ねていくことで、こんなたくさんみたいなというふうに思うので、次回がますます楽しみになっているところだなと思っております。ただ、今回は年明けなので間が空いてしまいますが、本日出たような話題を、また皆さんの日々の暮らしの中で思いを馳せながら過ごしていただいて、次回お持ちよりいただければと思います。

本日の終了時間が間もなく来てしまいますので、お二人の発表は以上とさせていただきます。ありがとうございました。それでは、最後に次回のご案内をお願いします。

○事務局 次回は1月16日金曜日の午後2時から、区役所の703会議室で行います。発表者は、竹内委員と藤野委員のお二人なので、もし話したいことに関わる資料がありましたら、事前に事務局にご連絡いただいた上で、お送りいただければと思います。

○議長 それでは、本日は閉会といたします。ありがとうございました。